

保育効果の研究

観察による研究 (その二)

愛育研究所 村山貞雄

西嶋淑子

この研究は、前年度の大会で発表した観察による保育効果の研究に続くものである。すなわち一斉保育場面、与える場面、誘導場面の三つの保育場面を観察して教師の保育態度の傾向とその効果を調べようとするものであるが、今回は、観察者が級全体の子どもからうけた印象によって評価した級の性格傾向と教師の保育態度との間にある関係を見出そうとした。

調査は都内にある幼稚園と保育園の六園で行なった。観察場面数などについては抄録集第一表に示してある。

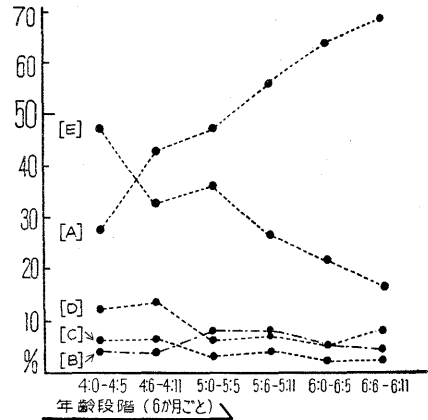
教師の保育態度は、十三項目に分類し、級全体の性格は、自主性・協調性・興味関心・発表力・明朗性・安定感・清潔感について五段階評価を行なった。これを年少組と年長組に分けて次の三つの面から検討した。(抄録集第二、三表参照)

(1) 各性格ごとにその評価得点の高い級と低い級とでは、その教師が保育中子どもに働きかける度合が違つかどうか。

これは、教師の保育態度項目の総頻数を性格の評価得点の高い級と低い級に分けて求め、その頻数の割合を観察場面数の割合と比較することによってみた。なおこの検定には χ^2 検定を使用した。この結果は抄録集第四表に示したが、どの性格項目も、得点の高低によって教師の子どもへの働きかけの度合がちがうのは一斉保育場面であり、年少組と年長組では特に年長組にそれがあきらかであった。

お友だちと一緒に、あなたもわるいことをして、お友だちだけじゃなかったら、あなたは どうしますか

- [A] 自分も謝罪する(上昇傾向 1%危険率内有り)
- [B] 友だちを気のどくに思う(下降傾向 5%危険率内無し)
- [C] 傍観している(下降傾向 1%危険率内有り)
- [D] 自分だけその場から逃げる(下降傾向 5%危険率内無し)
- [E] その他(下降傾向 1%危険率内有り)



このことから、四歳前半台までは、この種の質問場面に対応できる道徳意識は未だ充分に形成されていないのが、自然の姿と言えよう。

抄録第IV表からは、遊び相手の過失に対処する分別がみられる。《A無条件で許す》は、四歳後半からは男女差は殆んどなく、上昇傾向を1%の危険率で示している。《D謝罪を要求する》という分別は、男児の方が女兒に比較して常に高率である。七歳台になるとこの傾向は、自然に消滅すると推定される。《E弁償させる》・

《F許さない》は、共に5%の危険率では下降傾向はみられず、しかも五歳・六歳台でも10%近くの比率を示している点は、興味のあるところである。この点から、過失の意味の理解、それに対する寛大な分別の形成は、幼児自身のより程度の高い精神発達に待たねばならないと考えるが、日常生活を通して、その場面と年齢に応じてアドバイスの可能な分野とみられよう。

(大会抄録141-144頁)

すなわち、年少組では、一斉保育場面で協調性・明朗性・安定感・清潔感、与える場面で安定感・清潔感において、教師の態度数の割合が理論値からかけはなれていることをみとめた。しかし、いずれも性格評価の得点の低い級のほうがその割合が大きくなっていて、各場面・各性格による違いは全くみられなかった。年長組では、一斉保育場面で自立性・協調性・発表力・明朗性・安定感、与える場面と誘導場面で清潔感に違いをみとめた。年長組は、各場面、各性格による傾向の違いが出てきて、一斉保育場面において自立性が教師の働きかけが少ないほど得点の高い傾向を示しているのに反し、他の協調性・発表力・明朗性・安定感に教師の働きかけが多いほど得点が高い。また清潔感、与える場面と誘導場面で示す傾向が逆になっている。

(II) 各性格ごとにその評価の得点の高い級と低い級では、その教師の保育態度の内容がどう違うか。

これは、(I)と同様の方法で教師の個々の保育態度項目ごとのその頻数の割合を観察場面数の割合と比較することによってみた。

(抄録集第五表参照) 各性格を通じて問題になりやすいのは強制、指示などの項目で、問いかけや返答の項目もめだつた。

問いかけA(答を求める質問)は特に年少組の一斉保育場面で協調性と安定感の得点の低い方に多く、問いかけB(問いかけそのものに意味のある質問)は興味関心や発表力の得点の高い方に多いのはおもしろい傾向だと思ふ。

強制A(命令的態度)は特に年長組において問題になり、一斉保育場面では、どの性格項目も得点の低い方に強制Aが多かつた。得点の高い方に強制Aが多いのは誘導場面で、自立性・安定感・清潔感などにそれがあきらからである。

指示A(すすめる指示)が得点の高い方に多いのは発表力で、一

斉保育場面で特にそれがあきらからである。

気づかせA(気づかせてはげます)は特に年長組の誘導場面でとりあげられ、自主性・協調性・興味関心で得点の低い方に多い。なお協調性・興味関心は、気づかせB(気づかせてやめさせる)があきらかに得点の高い方に多い傾向を示している。

応報A(賞をあたえる)は殆んどどの場面で絶対数が少なく問題としてとりあげられなかったが、年少組の一斉保育場面で発表力、年長組の一斉保育場面で安定感のいずれも得点の高い方に応報Aがめだつて多かつた。これは、発表力を高めたり、安定感を増すために、一斉保育場面における賞罰の意義をはっきりさせていると思ふ。

(III) 各性格ごとの評価の得点の高い級と低い級では、教師の保育態度のうち、奨励的傾向と禁止的傾向の割合が違ふか。

これは、観察した教師の保育態度項目のうち、奨励的態項目と禁止的態項目をとり出して、その頻数の割合を前と同様比較した。(抄録集第六表参照)

どの場面でも禁止的態度が年少組により多くつかわれているのに、性格得点との関係は統計的にも有意といえる程のものが年少組にはなかった。年長組においては、禁止的態度はごく僅かしか用いられてないが、一斉保育場面と誘導場面に有意な関係がみられた。

すなわち、一斉保育場面において、禁止的態度は、自立性の得点の高い方のみみられ、逆に発表力では得点の低い方のみみられている。また協調性と安定感に奨励的態度が得点の高い方に特に多い。誘導場面においては他の場面より禁止的態度が多く、有意差をみとめられた自立性・協調性・興味関心の項目はいずれも得点の高い方に禁止的態度がめだつ。しかし同時に奨励的態度も、協調性・興味関心の得点の高い方に多いこともわかつた。(大会抄録146-151頁)